

出来事ファイル (No.21-9)

■ハーバーロード・ワーキング発足

6月号で「懇談会対象区域拡大・整備計画案検討へ」と題し、ハーバーロードから神戸駅間地域を弊協議会のまちづくり対象地域として拡大することをお知らせした。同地域は、神戸市が神戸駅周辺の再開発を検討する対象地域内でもあることから、弊協議会では、元町ハーバー懇談会とその地域に関係する方々に声をかけ、7月12日、エスタシオン・デ・神戸で「第1回ハーバーロード・ワーキング」を開催した。

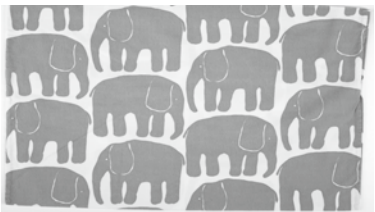


写真:きらら広場から神戸駅方面を見る

□読者プレゼント

創業200周年記念 フィンレイソン展
ーフィンランドの暮らしに愛され続けたテキスタイルー

フィンレイソンは、北欧フィンランド最古のテキスタイルブランドです。1820年創業以来、寝装品やホームテキスタイルを中心に、質の高い製品と洒落たデザインで人気を博し、日本でも広く知られています。ブランドの200年にわたる歴史と、その多彩な魅力を伝える展覧会です。観覧ご希望の方はハガキに「フィンレイソン展」希望として住所・氏名・年齢をご記入の上、本紙編集部まで。先着順で2組の方にペア招待券をお送りします。



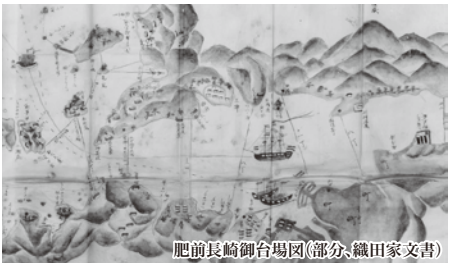
ライナ・コスケラ作「エレファンティ(象)」
寝具用生地(1969年)/タンペレ歴史博物館所蔵
Finlayson®©Finlayson Oy

期間:2021年10月9日(土)
～2022年1月10日(月・祝)
会場:京都文化博物館
電話:075-222-0888

□読者プレゼント

企画展 明石藩の世界図 ー幕末維新と人々のくらしー

本展は、旧藩主松平家・旧藩士黒田家などの武家文書や地域に残る古文書を展示、江戸から明治へとかわる時代の諸相を紹介する展覧会です。観覧ご希望の方は、ハガキに住所・氏名・年齢をご記入の上、本紙編集部まで。先着順でペア5組の方に招待券をお送りします。



肥前長崎御台場図(部分、織田家文書)

期間:9月11日(土)～10月17日(日)
会場:明石市立文化博物館 電話:078-918-5400

□読者プレゼント

企画展 発見された日本の風景 美しかりし明治への旅

明治の日本を描いた内外の画家たちによる200点以上の油彩画・水彩画を、「明治の日本に行く」「人々の暮らしを見る」「花に満たされる」の各章にわけてご覧いただきます。日本から海外へ渡っていたものを発見し収集したもので、ほとんどが初公開です。観覧ご希望の方はハガキに企画展「発見された日本の風景 美しかりし明治への旅」希望として住所・氏名・年齢をご記入の上、本紙編集部まで。先着順で5組の方にペア招待券をお送りします。



ウォルター・ティンデル
《ユダの木と清水寺》個人蔵

期間:9月7日(火)～10月31日(日)
会場:京都国立近代美術館
電話:075-761-4111

神戸元町商店街 楽市楽座 情報 9月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) 1a361-4523

9月 2日(木)～9月 7日(火)
第21回 風の会 水彩画展は、
2022年6月16日(木)～に延期になりました。
9月 9日(木)～9月14日(火)木曜会 作品展(中止)
9月16日(木)～9月21日(火)
木製帆船模型作品展
9月23日(木)～9月28日(火)チェリーの会展
9月30日(木)～10月5日(火)日彩会水彩画展

◇元町映画館(有料) 1a366-2636

8月28日(土)～9月 3日(金)
「わんぱく戦争」
「SILENT FILM LIVE短編ウィーク」

8月28日(土)～9月10日(金)
『カトリーヌ・スパーク レトロスペクティブ』
『ヒルコ/妖怪ハンター』レスタ&リマスター版
9月 4日(土)～9月10日(金)
『サンマデモクラシー』
『ベルヴィル・ランデブー』
9月 4日(土)～9月17日(金)
『全員切腹』(狼煙が呼ぶ+破壊の日 3本立て)
9月11日(土)～9月24日(金)
「台湾巨匠傑作選2021」侯孝賢大特集
9月18日(土)～9月24日(金)
「SILENT FILM LIVE 長編ウィーク」
9月18日(土)～10月1日(金)
「シュシュの娘」
9月25日(土)～10月1日(金)
「吉開菜央特集 Dancing Films」
【*時短営業の為、予定は変更になる場合がございます。】

神戸元町未来会議開く 神戸元町商店街で

元町商店街では7月12日19時から、流通科学大学・甲南大学教授らによる指導のもと、はじめての「神戸元町未来会議」をまちづくり会館で開いた。商店街側からは1～6丁目から若手委員を中心に17名が参加、1～3丁目と4～6丁目の2グループに分かれ、元町の「強み」と「方向性」について議論した。具体的にはブランドイメージ、立地、情報発進、新旧の融合、アクセス、空間、多様性の魅力などが議題としてクローズアップされ、具体的な対応面について意見交換、「未来会議」としてさらに議論をすすめていくことに。

神戸駅東地区クリーン作戦

神戸駅東地区クリーンチームは8月4日(水)12時からハーバー懇談会地域のクリーン作戦を実施した。スタシオン・デ・神戸から17名参加した。



栄町通クリーン作戦中止に
8月に予定していた栄町通クリーン作戦は、緊急事態宣言対象地域となった為中止になりました。

編集後記
平成3年にスタートした「みなと元町タウン協議会」は、令和3年3月節目を迎えた。これを記念して、事務局では昨年からの協議会30年の歩みに取り組んでいく。みなと元町タウンニュースは、協議会が発足の平成3年3月に創刊されており、その後、毎月発行されてきた。年史をまとめようと思いついた。年史をくめたのは、発足からの歩みが、原則毎月発行のタウンニュース上に収録されてきたからだ。平成6年以後、現編集者にパトントッチ、振り返ってみると休刊の月もあつたが、歩みをつなぐために必要な記録は保たれ、まとめることが可能になったといえる。30年史完成の日を前に、先人の労に、あらためて感謝の意を表したい。

みなと元町

タウンニュース

No. 348

Town News



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

線路に、建物に、街に私たちの生活が宿る。

行ったことがないのに“懐かしい”台湾

元町映画館 支配人 林 未来

“街(または町)”について映画の記憶を紐解こうとすると、まっさきに浮かぶのはアジア映画、なかでも台湾映画です。台湾という場所がそうさせるのか、台湾人のマインドセットがそうなのか定かではありませんが、台湾映画で描かれる人生はいつも街とセットになっているように感じます。登場人物の【背景】に街があるのではなく、街そのものが雄弁にその人生を語るのです。作品によっては登場人物の姿よりも先に街の風景が浮かぶくらい、強い印象を残します。私のまわりの映画好きの中でも、ロケ地に行った／行きたいというトピックスでは必ず台湾の話題になります。

台湾を代表する監督であるホウ・シャオシェン(侯孝賢)の映画(特にデビュー間もない80年代の作品)では、観賞後の脳裡に残るのは、どこか懐かしさと愛おしさを覚える情景です。それは自分の体験ではないのに、遠い日の記憶のように、微かに甘くにぶい光を放っています。



写真:『冬冬の夏休み』

『冬冬(トントン)の夏休み』(1984年)で、小学校を卒業したトントンと幼い妹のティンティンがひと夏を過ごす田舎の祖父母の家。玄関に植えられた大きなビンロウの木、川泳ぎの涼しさとだるさ、頬をくっつけて昼寝したくなるひんやりと暗い廊下。『恋

恋風塵』(1986年)で幼なじみの少年ワンと少女ホンが歩くローカル線・平溪線の線路、その線路すれすれに店があり生活がある十分老街の様子。

ホウ監督が〈台湾ニューシネマの旗手〉として世界的な評価を得るきっかけとなった『風櫃(フンクイ)の少年』(1983年)でロケ地になった澎湖島は、映画では寂れた海辺の街というイメージで、色の無い狭い世界を感じさせます。砂ぼこりの立つ道路、古めかしく無骨なコンクリートブロックの塀、建物と建物の間の狭い通路に設置された台所で繰り返される営み。淡々としてるように見えてつもの、その狭さに収まりきらない少年の生命力が映画を脈動させています。そこから地方都市・高雄にやってきた少年が空っぽの廃ビルから映画のスクリーンのように市街地を眺めるショット。



写真:『風櫃の少年』

そして二・二八事件を取り扱い、ベネツィア国際映画祭で金獅子賞(グランプリ)を受賞、ホウ監督を世界的名匠たらしめた『悲情城市』(1989年)は、九份で撮影されました。この



写真:『恋恋風塵』

映画では、街は登場人物たちの人生を語るにとどまらず、台湾の歴史をも語る重要な存在として機能しています。19世紀後半には金の採掘で賑わいながらも、その後閉山により忘れられた地となっていた九份。路地や石畳、急な狭い階段、夜になると灯がとる提灯など、日本統治時代の古きを残すその街並みは、台湾人が民族アイデンティティを守るため闘った哀しい歴史の証人でもあるのです。

そしてホウ監督の映画のロケ地になったことで、十分老街も澎湖島も九份も観光地として多くの人が訪れる場所になったといえます。それは有名な監督だからというだけでなく、庶民の暮らしとともに生きる街が描かれていたということが大きいのではないのでしょうか。台湾を旅するということは、知らない場所に驚きを求めて訪れるというだけでなく、どこか懐かしい、なぜか昔から知っている(ような気がする)場所に“帰る”という気持ちがあるような気がするのです。日本統治時代を経て親日家が多いとも言われる台湾。映画にも、日本の歌が思いがけなく出てきたりします。そんなところも台湾映画の魅力のひとつです。

海という名の本屋が消えた (94)

平野義昌

諏訪山界隈(12)

郷土文学研究者・宮崎修二郎(1922～2020年)は1951(昭和26)年「神戸新聞」入社。前職の大阪「国際新聞」時代から久坂葉子を取材し交流があった。あるとき葉子が「竹中郁をやっつけてよ」と言う。竹中が葉子の父に「VIKING」批判をしたらしい。註1

竹中と父は文化サロン「へちま倶楽部」(補註1)などで親しかった。父にすれば、竹中の言を支えに、娘の売れない小説を否定し、縁談を迫ったのだろう。その竹中は葉子に化粧品会社の仕事を世話している。補註2

〈あなたのお父さんのVIKINGへの誤解は竹中郁の僕への誤解に起因しているかも知れないし、僕の乱暴な葉書、またはVIKINGの例会記やC・C・(引用者註、富士執筆キャプテンズ・コーナー)に起因するかも知れません。或いはまたあなたのお父さんの状態に起因するのかも知れません。まあしかし、それは判らない。／幸福と生きるということが別のことであるやうに原稿が売れるということと、作品を書くことは別物であるらしい様子です。(後略)〉註2

富士は竹中との因縁について明確に思い当たらないし、関心もないようだ。富士正晴記念館館長・中尾務はそれらしきもの＝富士の講演嫌いを突き止めている。49(昭和24)年7月、倉敷での竹中と富士の講演だ。

〈……はじめに出た富士は七分間ほどで降壇。あとをまかされた竹中は富士の分もふくめ、一時間半の長丁場をこなすはめにあった。〉註3

講演会の詳細は不明だが、富士の随筆中に、同年同月倉敷レイオンの工場を見学した、とあるので、倉敷紡績がらみと思われる。註4

富士の葉子追悼行動を追って「諏訪山界隈」を終わる。

53(昭和28)年1月8日「大阪新聞」に寄稿。葉子が自殺決行の日に小説を書き終えたことを讃える。

〈……だが久坂葉子よ、お前さんは少し人生を焦りすぎた!〉註5

3月、「VIKING」47号と「VILLON」4号が共同して久坂葉子追悼号を刊行、遺作「幾度目かの最期」を掲載した。富士は「久坂葉子の死」と「キャプテンズ・コーナー」を執筆。既に遺作集の編集を始めていて、本の題を「女」としたことを明らかにする。

〈わたしは三十になった久坂葉子を、あらかじめ心に描いて、つねに楽しみとしていたそれはもう大した代物であったわけなのだ。そして二十一の久坂葉子はその計算をわたしにさすだけの代物だったのだ。〉註6

生前、葉子は富士にウナギと酒をごちそうする約束をしていた。知人に自分の代りに約束を果たすよう頼んでいた。律儀だった。〈律義ものの彼女を失ってわたしは惜しい。(中略)自殺する時、わたしが必ず彼女の小説集を出すだろうと彼女は思っていただろうと思う。自分が真正直だから、世の中の人の言葉を疑わないようなところが彼女にはあった。彼女はあまりに悪意がなさすぎたようだ。／大晦日をえらんだのは、切りが良いからだろう。元旦、わたしの家へ「青白き大佐」と一緒に来る約束になっていたそうだが、勿論ななかった。もう棺桶の中へ入っていたから。その代り大晦日の夜半にわたしの夢の中へ出て来た。死んで了ったからの時間だ。道も知らずによく来たことと思う。〉註6

夢の話は「贗・久坂葉子伝」に書いた。追悼号発行と同じ月、元「VIKING」同人の前

田純敬と島尾敏雄が葉子をモデルにした作品を発表する(前田は「VILLON」在籍、追悼号にも寄稿)。

前田「自殺者」。「K」の葬儀数日後に東京から弔問に訪れる。友人「ショノ」「フジ」と「K」の思い出を語り合う。註7

島尾「死人の訪れ」。自殺した「矢板康子」の遺稿集出版を考える「僕」と「牛来(ごらい)」の前に彼女の幽霊が出現し、一緒に印刷所に行く。帰り道、「僕」は彼女と二人きりに。「僕」は彼女を征服しなければまた自殺してしまうと考える。註8

〈(両作品について)実のところ、わたしとしては閉口した。久坂葉子についての解釈が彼等とわたしとひどく違っている故もある。また、大晦日に自殺した女を主題とした小説がたちまち四月号に二つ現われる素早さに驚いたという次第でもある。(中略)そこには死者へのいたわりよりむしろ、ニューズ・ストーリー作家風のいそがしい精神があるように思われる。〉註5

週刊誌・月刊誌が葉子自殺をスクランダラスに取り上げた。芥川賞候補で良い気になり、焦り、やけ酒、複数の恋人など、と。

4月、文芸誌「新潮」(新潮社)に「幾度目かの最期」が川崎家の許可なく掲載される。どういう経緯で原稿掲載に至ったのか不明。遺族は激怒し、原稿料を叩き返した。註5

6月、富士は葉子の作品集『女』を人文書院より刊行。芥川賞候補「ドミノのお告げ」ではなく、元の「落ちてゆく世界」を収録した。富士は「編集者の編集者的指導により、数回書き直しをさせられ、変にあくどくなっている」と判断した。遺族は富士に編集を依頼したが、「幾度目かの最期」掲載は同意しなかった。

〈……彼女を死の世界から呼び返し、この本を見せてやりたいと思うのはわたしのみではあるまい。わたしは彼女の挫折・死を思うとき、激しいきどおりを感じる。だが、彼女に関するかぎりもう手おくれである。〉註9

12月、富士は「VIKING」50号を記念して仮想の祝賀講演を連載(56号、54年10月まで)。創刊以来の波瀾万丈の「航海」を語る。〈……兎に角われわれはVIKINGをダラリダラリとつづけながら、月刊にかえずことに努力しましょう。悪作を書きましよう。(中略)全く早いものですね、47・48・49・50号の四作作っている間にもう、一年。久坂葉子の死んでからもう一年。あ、個人的な感傷をお許し下さい。(後略)〉註3

54(昭和29)年、富士は「新女苑」(実業之日本社)8月号に「久坂葉子覚書」を発表。彼女との出会いから最後の1日までを書いた。

同年12月から富士は「VIKING」に「エリザベス版久坂葉子伝」(翌年5月まで)、並行して翌年1月から「近代文学」に「贗・久坂葉子伝」(12月まで)を連載する。「エリザベス版」は、「VIKING」のエリザベス＝葉子の文章によって彼女の「本当の姿を何とかして組み戻し」たい、というもの。「贗～」は、遺族の「幾度目かの最期」掲載拒否により、「その作品をばらばらにして、わたしのものとして消化し組みこむことによって、『私』の作品を書き上げよう」と考えた作品。註5

富士は「贗～」序章に葉子死後発見した未発表原稿2枚(1952年の表記あり)を挿入した。六甲駅での鉄道死、遺書なし、関係者たちのコメントまで予言する。〈一週間たった。もう誰一人彼女のことをいう者

はいなかった。小さい命は誰の頭にもこのらなかった。(久坂葉子)〉註10

56(昭和31)年12月31日葉子命日、富士編集『久坂葉子詩集』(発行兼装釘者 萌木 森口太郎、限定200部)発行。版元「萌木」の森口は版画や豆本など少部数限定本を制作・販売していた。富士は同書の「あとがき」で、葉子が和紙を使った帽子製造を創案し森口に相談していた、と記す。

〈詩集の相談にのったわたしと、帽子の相談にのった森口太郎が協力したわけだが、彼女の好きだった上質の和紙を用い、彼女の命日までに作り上げることが出来たのは嬉しい。(中略)久坂葉子愛する人びとの手に入ることを切に望む。〉註11

葉子はほぼシナリオどおり自ら命を絶った。しかし、多くの人が自分を記憶し伝えることを想像していなかっただろう。

富士は葉子を作家として育成したかったが、叶わなかった。彼女の自殺を止められなかったことはあまりに大きな悔いだった。

註1 今村欣史「触媒のうた 宮崎修二郎翁の文学史秘話」神戸新聞総合出版センター 2017年

註2 富士正晴編「久坂葉子の手紙」六興出版 1979年

註3 富士正晴「仮想VIKING50号記念祝賀講演会に於ける演説」富士正晴記念館 2015年

註4 富士正晴「地理・歴史」(「VIKING」10号、1949年)所収

註5 富士正晴「エリザベス版久坂葉子伝」『贗・久坂葉子伝』(六興出版、1981年)所収

註6 「VIKING 47・VILLON 4」1953年 写真は同誌表紙と目次(『初期「VIKING」復刻版第7巻」三人社、2017年)

註7 前田純敬「自殺者」『久坂葉子研究』4号(同研究会、2008年)所収。初出「群像」53年4月号。

註8 島尾敏雄「死人の訪れ」『久坂葉子研究』2号(同研究会、1983年)所収。初出は「新潮」53年4月号

註9 『久坂葉子作品集 女』六興出版 1978年

註10 前掲、富士正晴「贗・久坂葉子伝」

註11 『久坂葉子詩集』六興出版 1979年

補註1 1945年栄町通3丁目西村旅館(1869年・明治2年創業)西村貫一(1893～1960年)が焼け跡にクラブハウス「へちま倶楽部」を建て、サロン「金羅会」を開く。月刊誌発行、講演会、落語会、美術展、ヌード撮影会他、九州の炭鉱争議に義援金を募るなど幅広い活動を展開(竹十主人「へちま倶楽部と貫一」『ほんまに』vol.14 くとうてん、2011年)。

補註2 「私はこんな女である 久坂葉子遺作集」(和光社、1955年)の富士の解説。〈(昭和26年の)「VIKING」脱退後、N化粧品会社囑託N民間放送会社囑託となる。前者は詩人竹中郁、後者は作家京都伸夫の世話による。〉とある(前掲『久坂葉子研究』4号)。放送局は宮崎修二郎が、「何か仕事を、と頼まれましてね、京都伸夫さんの紹介で新日本放送(現・毎日放送)に世話しました」と語る(前掲『触媒のうた』)。

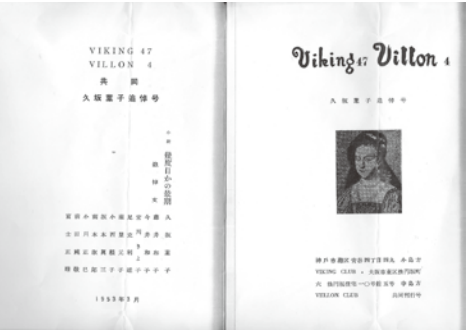


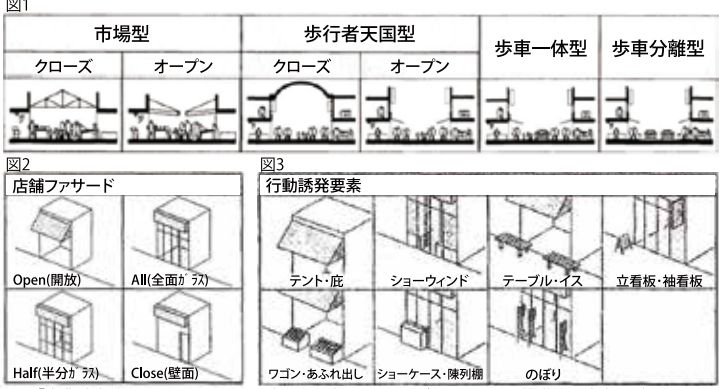
写真:久坂追悼号

みなとMIO MACH ケンチクさんぽ vol.2

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部
兵庫地域会 地域まちづくり委員会

元町商店街のお店の構え

元町周辺を建築の専門家がウロウロして、建築的視点で今まで気付かなかった良さを見つけ出すという連載の二回目です。J I Aの仲間が交代で担当します。今回は私の勤める旧神戸山手大学(現関西国際大学)の2017年卒業のK君が調べた元町商店街の卒業論文から、商店街の特徴を見てみましょう。タイトルは「商店街における店舗の外部構成-神戸元町商店街における実地調査を通して-」です。この論文の参考にしている有馬さんたちの研究※1に商店街のタイプの分類があります(下の図1)。分類を元町周辺に当てはめると、市場型の屋根ありは「モトコータウン」、屋根なしは「南京町」、「元町商店街」は歩行者天国型屋根ありでしょうか。乙仲通りは「歩車一体型」、大丸百貨店以東が「歩車分離型」にあたるでしょう。そして商店街を形成する大事な要素が二つあるとしています。お店の外観のタイプ(店舗ファサード)とサイン他(行動誘発要素)です。外観はopen(オープン)、all(全面ガラス)、half(部



※1「商業地街路における行動誘発要素と歩行者のアクティビティに関する基礎的研究(2008)」有馬他

商店街から広がる街

K君の調査のその後を確かめるために商店街を1番街から6丁目まで歩いてみました。当時とお店が入れ替わっている所もあり、悲しいのは閉まったシャッターに「テナント募集」の張り紙が見られることです。少し悲しみに浸りながら歩いていると、ふと横を見て、路地の向こうにポートタワーが正面に見えたときに心がぐつと明るくなりました。前回のコラムに繋がるシンボルの力でしょうか。すべての路地路地からポートタワーが覗けたら、嬉しいでしょうね。歩き進んで5丁目辺りから商店街のカーブが少しきつくなり奥が見通せないところがありました。これもなかなか良い感じです。すずらん灯がうまい具合に連続している感じがとても良く、歩く楽しみになります。そして商店街のなか

分ガラス)、close(クローズ)の4タイプ(図2)、サイン他はテント、ショーウィンドウ、ワゴン、ショーケース、テーブル・椅子、立て看板、のぼり、の7タイプ(図3)あるとしています。

ファサードタイプでは商店街全体ではオープン型(32.9%)と全面ガラス型(36.5%)が半数を占めています。1番街から西に行くに従いオープン型が減り、全面ガラス型が増えているようです。1番街～4丁目は服飾店が一番多いのですが、5丁目は飲食店が一番多いという結果でした。ファサードと業種の関係を見てみましょう。服飾系の多い1番街から4丁目はオープン型と全面ガラス型が半数以上を占めますが、飲食店の多い5丁目はオープン型とクローズ型がほぼ同じ数となっています。飲食店はやはり丸見えなお店を避ける傾向があるようです。

サイン他の特徴を見てみるとオープン型と全面ガラス型はワゴンとショーウィンドウが多くなっており、クローズ型になると立看板が多くなります。

有馬さんらの結論は、車両の有無、アーケードの有無、立地がお客さん達のア

1,2. 南京町
3. JR高架, 六甲山
4. ポートタワー
5. 緑の「門」かも
6. 移動キッチンカー

クティビティに大きな影響があるとしています。オープン型は歩行者専用道に立地した食品、物販、服飾系に多く、ワゴン等の要素を備え、購買活動を発生させていて、商業的活気を作り出しているとのこと。全面ガラス型は市場型以外の服飾、物販業が多く、ハーフ型は歩車分離型街路に多くサインも少なくアクティビティにあまり影響しない、とのことでした。

そして次のような指摘もしています。「綺麗なショーウィンドウばかりの大型商業施設では路上に活気あるアクティビティをもたらさない。」と。そして「歩行者天国などの社会実験や公的空間の整備なども盛んに実施されているが一方で民間の建物・店舗のデザインも含めた中心市街地のマネジメントも必要ではないか」と問いかけています。

この「活気あるアクティビティ」こそ今後の元町が求めているものであるならば、民間主体で構成されているみなと元町タウン協議会の役割は、今後ますます重要になってくるのではないのでしょうか。

のベンチが登場しました。商店街を歩く所だけでなく、立ち止まり、話をし、休憩する場所とする設えはもっとあってよいと思いました。折角広い商店街を道路としてだけでなく、滞在場所にすることは有効でしょう。6丁目の入口横の壁の続くビルの前にキッチンカーのカフェがあり、上手く壁の寂しさを賑わいに変えていました。

商店街を再訪し気付いたことは「元町商店街の魅力は辻々にあり」でした。商店街と交わる路地や道路から見える景色の魅力は他の商店街には見られません。路地の向こうに南京町がチラチラと見えるのはとても魅力的です。北側を路地から見ると六甲の山々の頂きが見えます。次の路地からは元町のJR高架と走る電車、モトコータウンが見えます。元町北通りの雰囲気がチラチラと見えるのも良い感じです。極めつ

けは南側を覗いたときにドンと正面に見えるポートタワーでしょう。路地の入口は裏通りへの魅力的な門となり、表通りの商店街から人を奥へ誘い、賑わいが面として広がっていきます。だから商店街の交差点での「門」のデザインが大事になります。積極的に辻々の構成をより意識的にデザインできないでしょうか。

「何か提案を」と言っていただけでしたら、関西国際大学の学生が、いやいやJ I Aのメンバーも(きっと)、よろこんで案を作りますので、是非ご一報ください。

山隈 直人 (やまくまなおと)
(株)kt一級建築士事務所 代表
／関西国際大学(旧神戸山手大学)
現代社会学部総合社会学科 教授
／2015-2016年度乙仲通界隈デザインワークショップ実行委員